

「うやむやにするな」と叫びながらいつも「うやむや」になるのはなぜか

《現代でも抵抗がないわけではない。だが「水を差す」という通常性的空気排除の原則は結局、同根の別作用による空気の転位であっても抵抗ではない。従って別「空気」への転位への抵抗が、現「空気」の維持・持続の強要という形で現われ、それが逆に空気支配の正当化を生むという悪循環を招来した。従って今では空気への抵抗そのものが罪悪視されるに至っている。これはロッキード事件で絶えず言われた「うやむやにするな」という言葉にも表われている。これはロッキード糾弾の「空気」をあくまでも維持せよとの主張と思うが、それでも結局「うやむや」になる。では一体なぜ「うやむや」になるのかは、稿を新たに「うやむやの研究」として取り組むべき問題だが、この「うやむや化の原則」は、もちろん「空気と水」の関係に基づいている。》

山本七平は『「空気」の研究』という表題の著作の「あとがき」でそう記すが、「水を差す」ことが「空気支配」への抵抗たりえないのは、「水を差す」ことによって「空気支配」を終わらせることになるのではなく、別の「空気」の転位に向かわせるにすぎないからだ。たとえば、《「ロッキード徹底追究」という「空気」には、否応なく「通常性の水」を差される》としても、《だれかが意識的に「水」を差そうとしなくても、「徹底追究」を叫ぶ人の通常性自体がその叫びに「水」を差している》ことになるからである。つまり、ロッキード事件が発生する通常性と、「ロッキード徹底追究」を叫ぶ人の通常性とは同一基盤だから、自らの通常性そのものに水を差しつづけないかぎり、「徹底追究」の叫びは別の「空気支配」への転位にすぎなくなってしまう。《その人が日本の通常性に生きている限り、その「空気」を「追究完了」まで持続させることはできない》からだ。

《言うまでもないが、元来、何かを追究するといった根気のいる持続的・分析的な作業は、空気の醸成で推進・持続・完成できず、空気に支配されず、それから独立し得てはじめて可能なはずである。従って、本当に持続的・分析的追究を行なおうとすれば、空気に拘束されたり、空気の決定に左右されたりすることは障害になるだけである。持続的・分析的追究は、その対象が何であれ、それを自己の通常性に組みこみ、追究自体を自己の通常性に化することによって、はじめて拘束を脱して自由発想の確保・持続が可能になる。空気で拘束しておいて追究せよと言うこと、いわば「拘束・追究」を一体化できると考えること自体が一つの矛盾である。これを矛盾と感ぜない間は、何事に対しても自由な発想に基づく追究は不可能である。言葉を換えれば、最初に記したように、対象を臨在感的に把握することは追究の放棄だからである。

このことは「うやむやにするな」と叫びながら、なぜ「うやむや」になるかの原因を「うやむや」にしていることに気づかない点にも表われている。いわば「うやむや反対」の空気に拘束されているから「うやむや」の原因の追究を「うやむや」にし、それで平気でいられる自己の心的態度の追究も「うやむや」にしている。これがすなわち「空気の拘束」である。そして少なくとも昭和期以前の日本人にあった「その場の空気に左右される」ことを恥と考える心的態度の中には、この面における自己追究があったことは否定できない。》

なにかを持続的・分析的に追究するといった根気のいる作業は、もちろん「空気支配」の中では行われえないから、まず、「空気支配」を粉砕することによって、その影響から脱するようにはなくてはならない。《持続的・分析的追究は、その対象が何であれ、それを自己の通常性に組みこみ、追究自体を自己の通常性に化することによって、はじめて拘束を脱して自由発想の確保・持続が可能になる》と言うとき、「空気支配」の打破を《自己の通常性に化する》という不断のたたかいを前提としなければならない。「うやむやにするな」と叫ぶこと自体がすでに「うやむや」にすることであるのは、どうすれば「うやむや」にしないことであるのか、を同時に提出しようとしなからず。

《一体なぜこの「自己追究」が消え、全員空気拘束主義の独裁化を招来した》のか、と問うて、山本は、新井白石は『西洋記聞』において潜入してきた宣教師シドチの中に、聞くべき「賢者の言葉」と聞くべきでない「愚者の言葉」を見出したことに言及する。前者は《シドチの人文科学上の知識と世界情勢に関する広範な認識であり》、後者は《シドチがそれを伝えるためにわざわざ日本に潜入して来たキリシタンの教えであった》。いうまでもなく白石に賢愚と見えたものは、シドチという同一人

物の中に不可分なかたちで同居しており、白石はシドチの《教えの「愚なる部分」は日本には入れるべきでない」と結論し、彼の対キリシタン政策は鎖国哲学として《今も日本を拘束しているといえる》。

《一体なぜ、キリシタンがいけないのか。その結論は一言でいえば、儒教を基にした日本的序列的集団主義に反するからであろう。個人が「天」と直結することは許されず、個人は常に自己の所属する集団を「天」とし、その集団はさらに上層の集団を「天」とし、人には「二尊」があってはならない、もしそれを認めれば一切の秩序が崩壊するから、キリシタンはいけない。これが彼の結論である。》

日本では個人は集団に従属するものであるのに対して、西欧では《個人は「天」に直結するのが当然であり、人は常に個人として神と対面しているものとして規定されていた。「ヤハウエの顔は避けることはできない」で、人は神との対面を避けることができないわけである。》要するに、個人というものが集団に解消されていくことで成り立っている日本的序列的集団主義の社会が、《人は常に個人として神と対面しているもの》とする西欧の発想を受け入れられるはずがなかった。

西欧的発想に貫かれていない、単なる《シドチの人文科学上の知識と世界情勢に関する広範な認識》のみであれば、安全な知識・情報として聞くことができるから歓迎するけれども、シドチが日本にやってくるようになったミッション（布教）は危険だから歓迎しないということである。シドチの中に見出される、安全な「賢者の言葉」と危険な「愚者の言葉」という「二人の言」は、西欧だけでなく日本にもあった。《ただ常にそれを意識せず「現人神と進化論」と言われた途端に、この白石的な「天」と「西欧近代思想」との「二人の言」を全く意識していなかったことに気づくわけである。》意識しなかったのは、現人神としての対象に《感情移入することによって、対象に完全に支配される》なかで進化論は単なる知識として溶解されてしまい、《その時々その方向において「一人の言」しかその心にもっていない》ことになるからだ。

《そしてそれはまた集団の中でも「二人の言」をもち得ず、完全に空気に拘束されてしまう理由であり、同時に、その体制化として「隠し合い」の倫理がある》ことになってしまう。西欧でも日本でも、人々は「二人の言」をもって生きている。この各自の内にある「二人の言」への対処の仕方において、西欧と日本とは全く異なっていた。西欧では《常にこの「二人の言」を意識し、それをいかに自らの人格の中に結合さすかを考え、絶えずその緊張関係に生きてきた》のに対して、日本では「二人の言」は感情移入された「一人の言」に完全に支配されるなかで封印され、《「一人の言」しかその心にもっていない》ようになっていき、西欧のようにその「一人の言」の暴走を制御する「もう一人の言」をもたないために、完全に「空気」に拘束され、集団内で「隠し合い」の倫理を育てていくことになる。

両立しがたい「二人の言」を抱え込む緊張関係の中で、けっして「一人の言」に支配されずに生きてきた西欧の歴史からすれば、たとえば「現人神」を一方で信じながら、他方で「進化論」を受け入れている日本人は理解しがたかった。彼らからすれば、両立しがたい「現人神と進化論」をなんの矛盾もなく受け入れているようにみえることが、驚きであったのだ。もちろん、西欧のように「現人神」によって「進化論」を否定し、「進化論」によって「現人神」を否定するというかたちで、相互に制御装置として作用するという緊張関係をつくりだしているわけでもなかった。日本では「現人神」は支配者として国民に生きられていく対象であったが、「進化論」はけっして「現人神」と同次元にはなく、「現人神」と交差する概念として生きられることはなかったのである。

ただ儒教的道徳体系が存在していた過去の日本では、《人びとは基本的にはこの体系に生き、この体系の中で自己を位置づけていたから、集団がこの体系にそくしている限り、「二人の言」はあり得なかった》と、山本は言う。この精神的体系を生きることで、各集団内部に属して生きていることとの間にどんなズレも生じなければ、すなわち、「内と外」の概念が生じてこなければ、当然「一人の言」しかあり得なくなる。ところが、近代化を急ぐ日本社会が単一の儒教的道徳規範のなかで生きることが困難になったとき、日本人は社会の中で生きる自分と、属する集団の中で生きる自分の「二人の自分」を抱えこんで生きていかねばならなくなった。西欧であれば、この「二人の自分」を意識しながら、《それをいかに自らの人格の中に結合さすかを考え、絶えずその緊張関係に生き》るのであるが、日本では「二人の自分」を《自らの人格の中に結合さす》ことに労力を払わなかったから、「空気支配」の集団に属しているときの自分と、その集団から離脱したときの自分との行動にいかに矛盾が生じていようとも、人々は意に介しなかった。